

*****目次*****

- P1 私の災害体験 石橋修作
P2 私の災害体験 藤田憲治
P2 新専任幹事 鶴 敏子
P3 仲間たちの近況報告 (1)
1班 古賀さつき
P4 仲間たちの近況報告 (2)
2班 堂下登美子
3班 宮阪信次
P5 仲間たちの近況報告 (3)
4班 鶴 敏子
5班 瀬野 巖
P6 仲間たちの近況報告 (4)
6班 坂口あつ子
リレー随筆 藤原雄平
P7 写真コーナー 根崎明義
P8 自由題 米虫和子
俳句・川柳・絵画サロン

◇自然と文化だより◇

23号に投稿頂いた皆様、有難うございました。2011年12月(11号)から3年近く編集をさせて頂きましたが、今号より野村さんに編集をバトンタッチする事になりました。今後とも「自然と文化だより」のご愛読、記事の投稿など宜しくお願い致します。

23号ではTOPICSの替りに「私の災害体験」としてご応募頂いた体験談を掲載させて頂きました。 N.Take



私の災害体験 「搭乗手続きに5分遅れて生かされた命」

2班 石橋 修作

1985年(昭和60年)8月12日羽田空港18時12分発伊丹空港行のボーイングJAL123便が18時56分に群馬県多野郡上野村の御巣鷹の尾根に墜落。乗員乗客524名のうち死亡者数は520名、生存者は4名で、死亡者数は日本国内で発生した航空機事故では最多であり、単独機の航空事故としても死者数世界最多と言う最悪の事故となった。

筆者は、東京での会議を終えタクシーで羽田空港に駆け付けたが、途中交通渋滞に巻き込まれ伊丹空港行の予約便JL123の搭乗手続きに5分の差で間に合わなかった。

空港は、お盆の帰省客や夏休みを利用した家族連れや、ビジネスマンで混雑しすべてのフライトは満席状態であったが、一時間後の伊丹空港行の最終便JL125便の搭乗券を確保することが出来た。

定刻通り伊丹空港に到着したとき、到着ロビーのテレビに多くの人々が群がっているのを横目にタクシーで帰途に付いた。帰宅後テレビの臨時ニュースで、日航機が行方不明で3時間飛行の搭載燃料が無くなる時間が迫っているのに目的地の伊丹空港に到着していない。全国の航空管制塔等による捜査が始まった、との報道が流れていた。

行方不明機とは、まさに羽田で乗り遅れたJL123便であり、筆者が乗り遅れた席にウェーティングリストの最初の予約客が搭乗し、御巣鷹山の墜落事故に遭遇されたことになる。間一髪で命拾いをした。

後日の報道で知る事になるが、歌手の坂本九さんや阪神タイガースの球団社長、ハウス食品社長、等々多くの著名人やビジネスマン、家族連れもJL123便の搭乗客で犠牲者となった。

尾翼と水平翼を失ったJL123便は操縦不能となり、フゴイドやダッチロールを繰り返し、急上昇と下降を繰り返し迷走。墜落までの恐怖のフライトを17分間に6,000mも続けた様子がフライトレコーダー等の解析で判って来た。この間、搭乗客が受けた恐怖は想像に余りある。

今年、事故と同じ8月12日にアサヒ放送TVがドキュメンタリーとして放映した長



時間の再現ドラマを見た。当時の一連の事故報道がフラッシュバックし、航空機事故の悲惨さと生かされた命の尊さを改めて実感し、亡くなられた方々のご冥福をお祈りした。

添付の軌跡図は離陸から墜落までのボイスレコーダーと管制官との通信に基づき作成された。運輸省（当時）航空事故調査委員会は、墜落より7年前に離陸時に発生した尻もち事故の際、ボーイング社が行った修理のミスが原因で、客室と機体尾部を隔てる後部圧力隔壁が破壊。全ての油圧システムと水平・垂直尾翼を失い操縦不能になったと認定した。

しかし、恐怖の墜落事故の原因が解明中の翌月には業務の為に予約済みのJAL便でヨーロッパに出かけ、以後も色々な航空会社便を使っているが、辛い事故に遭遇せず長らえている。

＜最近の航空機事故＞

2014年1月から現在までの世界航空機事故は7件発生しているが、①3月8日クアラルンプール発北京行のマレーシア航空のボーイング370便が乗員乗客239人と共に消息不明、未だ行方が分からない。②7月17日アムステルダム スキポール発クアラルンプール行の同じマレーシア航空ボーイング17便の298人が全員死亡。ウクライナ上空で空中分解し墜落。

某国のミサイルにより撃墜されたとの戦慄する報道もあるが、何れの事故も詳細は不明である。

とにかく、航空機事故は悲惨である。

私の災害体験

宇治川決壊

1 班 藤田 憲治

昭和28年9月25日、私が6歳の時、台風13号（テス）が来襲して宇治川の左岸が観月橋の下流で決壊しました。槇島・向島から元小椋池に至るまで水浸しになったのを覚えています。元々、小椋池は桂川・木津川・宇治川の三川合流地点にかけての遊水池でした。周囲16キロメートルに及び京都府最大の淡水湖でした。淀の京都競馬場の中央にある池はその名残で、レッドデータブックの調査地点にもなっているようです。小椋池干拓後も田圃状態で、よくオニ菱の実を拾い、石で割って食べたものです。この洪水により「天ヶ瀬ダム」が建設されて、昭和39年に竣工しました。天ヶ瀬ダムは私の高校時代のデート場所でした。

「自然と文化科」から見た企画とは

企画専任幹事 鶴 敏子

前年度から企画専任幹事を打診されながらも地元での活動引き継ぎのため、昨年は単なる企画委員として、班の企画幹事の補佐活動をしてきました。代表から『「自然と文化科」として、女性の幹事候補を今年度は考えている。企画専任幹事となり、活動してほしい。』という話がありました。企画担当が嫌いでもない私ではありましたが、幹事として貢献してこなかったことと、男性社会の中で、さほどの技能も有しない私が務まるか、不安いっぱい引き受けました。

今年度は102名の大所帯で、例年の4班から6班体制となり、先輩の企画委員の方も1名程度しか所属されていない、今までのやり方では運営が難しく、各班の企画幹事の方に積極的に運営に関わってもらうこととしました。企画からの送信も、以前は専任幹事から「自然と文化科」科員に一斉送信をされていました。しかし、企画は参加費が発生する事が多いのと、ガイド等お願いする相手があることから、参加人数の把握を班の幹事がすることが一番望ましいと思い、負担を承知で実行していきました。今では班毎の企画運営は割り振り通り、順調に遂行されていると思います。そこには、班の企画幹事を元に、素晴らしい企画が運営されており、ある企画幹事は歴史散策に精通され、ある幹事は想像しない楽しい企画を提案されています。

その中で、企画の一番気を使う一泊研修旅行があります。大所帯になった今年は、近場で懇親会をしてはという案が、当初挙がりました。色々検討された結果、今年度も従来通りのバス利用一泊研修旅行を実施する事に決まりました。

なかなか具体的な案が出てこない中、同期の仲間から「吾妻山」は自然が一杯あって良いよと提案があり、早速ネットで検索をしてみました。確かに比婆山に近く自然は豊かそうで、又民話のふるさとでもありました。80人近く泊まれるかどうかを現地に問い合わせし、参加人数が確定していないが、とにかく80人の宿泊を仮予約する事にしました。

その頃、腰を痛め、膝が悲鳴を上げている自分が企画専任幹事として就いていけるだろうか、不安は最大でした。

8月に入り、運営委員会に一泊研修旅行提案書を出し、研修旅行の本格企画が始まりました。

行程を含め、予算等の検討が始まりました。一番ショックだったのは、バス代の高騰で、バス会社の

決定ができません。従来利用していたバス会社と他社の比較から始めるが、安全を重視した結論が必要です。昨年、地元で自主観察会を行っていた関係のバス会社の予算見積もりを取り、仮予約をしました。やっと糸口が見えたのだが、そこからが又別の苦しみとなって行きます。「自然と文化科」らしい企画案をと運営委員会で言われ、「らしい企画とは何だろう。文化を取り入れ、観察を取り入れるが、観光地ではないか。もう一泊研修は止めにしようか。」と思った矢先、ある運営委員が『『自然とは』を大きく捉えた専任幹事の考えで運営すればよいと思うよ。』と言って下さった時点からスイッチが入りました。宿泊先の方と連絡を取りながら、湿原案内ガイドさんの確保、弁当屋さんへの交渉と提案どおりに進んでいきました。8月の下見で、場所選定の確認もでき、後は幹事の皆さんとバス中・懇親会用のプログラム作りと役割分担が決まって行きます。この企画を進める中で、地元の方たちとの触れ合いを通して、とてもいい体験をさせて頂きました。

研修旅行とは、「体験・堪能・貢献・学習・交流」の5つのキーワードを参加者一同が感じて、よい思い出に繋がる事だと思っております。

良いアイデアがあれば、企画委員会まで！！



帝釈峡の雄橋



シラヒゲソウ

まさかの変身

1班 古賀 さつ子

自然と文化科の観察委員会は、私達をいっぱい植物観察に連れて行ってってくれるところと認識していた。野山で可愛い花々を見、フィトンチッドを吸いながら自然の樹木を眺める。そして、優雅に舞う蝶に出会い、軽やかな鳥のさえずりを聴く。これは至福以外の何物でもない。時には恐怖の幼虫を目にし、青ざめることもあるが、しかし先輩方が説明する植物を観察するとき、私はとても幸せな時間を感じた。

ところが、その幸せはあっけなく打ち砕かれてしまった。観察委員には順番で観察会のリーダーが回ってくるというのだ。話し下手で植物音痴の私がリーダーをする？“もうイヤだ、自然と文化科を辞めてやる！”と心に決めた。

しかし、途中で辞めたら払い込んだ会費がもったいない。そして、何よりリーダーが巡ってきたから辞めるというのでは、女の沽券にかかわる、と妙な意地を発揮し、残り数ヶ月、科に留まる事にした。そうは言うものの、“知りません”、“分かりません”は通用するはずがない。

そこで、自然大学校に入ってから2年半目にして初めて、そこに生えている植物を調べ、同期の仲間に付き合ってもらい、下見の下見にも行った。そうして幾度か観察をするうちに植物と名前、そして特徴が少しずつ結びついてきた。

そうなると思えば不思議なもので“眺めているだけで幸せな植物”から、触って、匂って、味見してと、やたら興味がわいてきたのだ。

M氏の『古賀さん、次のリーダーをやってみたら。』の一言が、私を180度変えたきっかけとなった。植物に関して言えば、今、やっとスタート地点に立ったところだが、これから少しずつ前に進んで行ける気がしている。

そういうわけで、一度は辞めると決心した自然と文化科だったが、来年もお世話になるつもりでいる。



思いがけない出会い

2班 堂下 登美子

11 月下旬、右膝の手術の運びとはなったが…。両膝の調子はずっと良くなかったので、自然と文化科への参加も近頃では座学のみであった。仕方なく読書などをしては時間をつぶしていた。

『山の絵本』（尾崎喜八著 岩波文庫）を書名と表紙絵にひかれて手に取った。新聞や雑誌などに寄稿した文章を集めた本である。初出一覧を見ると昭和5年から10年までの26編。昭和の初めに書かれただけに難解な言葉や今や無い物もあったが、どのページを開いても豊かな自然が描写されていて、想像するのが楽しかった。私の知らない植物名も次々と出て来た。気になる植物だけ手元にあった原色牧野日本植物図鑑や原色樹木図鑑で調べたりしながら読み進めた。

そのうち、大変驚かされた文章に出会う。題名は『胴乱下げて』である。この著者・尾崎喜八は私の愛用する植物図鑑の著者・牧野富太郎先生の率いる東京植物同好会の採集日に参加し、この頃は老人となられていた牧野先生の人となりを書いているのだ。植物分類学上の偉大な業績はさておき、老若男女60人程の参加者に対する、また、植物に対する慈悲深い対応ぶりがいく例か書かれていた。例えば、『——腰に小さい風呂敷包みの弁当を下げ、肩から小さい胴乱をつるした子どもが、何か小指の先ほどの植物を探して来て、「先生これは何ですか」と訊いたとき、「これは松」といいながら、その子の頭へ片手を載せられた時の、あの温顔の美しさを僕は忘れない。』と。これまで雲の上の人のように思っていた牧野富太郎先生がぐんと身近に感じられた。この後も、原色牧野日本植物図鑑で調べたが、それまでと違って説明の文が立ち上がり、私にも話しかけてくださるような気がしてきた。図鑑に血が通い出したのだ。

半年ほどはかかるという両膝の手術とリハビリを終わらせて、書物の上ではなく、野山で実物を見てから原色牧野日本植物図鑑で調べる日よ、早く来い。



終活の備え

3班 宮阪 信次

私は阪急南千里駅の近くに住んでいて、早朝、愛犬リッキーと近くの南公園を約40分散歩することを日課にしている。いろいろな人との出会いと絆について考えさせられているこの頃である。



（平均寿命と健康寿命の差）

森毅京都大学名誉教授の本「人生20年説 人は一生に4回生まれ変わる」を座右にしている。その本は、「人生80年の現在、ひとつの考え方で生きるには長すぎる。人生=20年×4回。受験・恋愛・結婚・就職などなど、人生において出会う数々の節目をどう生きればいいのか。」について述べられた人生を輝かせるためのユニークな人生論である。

厚生労働省のホームページに、男性の平均寿命は80歳に、健康寿命は70歳だと書かれている。その差は約10年間。健康寿命とは人が自立して生活できる寿命であり、寝たきりになって、家族や介護の人の支援がないと生きられない状態は健康寿命には含まれない。60歳の時、あとの20年間長い第二の人生をどう生きるべきか考え、いろいろ取り組んできたつもりだ。古希を過ぎた今、残りの10年間を意識して、生き方を選び、生きていかなければならないと痛感させられている。

（終活へのいざない）

「〇活」という言葉が巷にあふれている、「就活」、「婚活」など。終活とは「人生の終わりのための活動」の略であり、人間が人生の最期を迎えるにあたって行うべきことを総括したことを意味する言葉。主な事柄としては生前のうちに、自身のための葬儀や墓などの準備や、自身の財産の相続を円滑に進められるための計画を立てておくことが挙げられている。私はさらに具体的に、やり残したことをやりとげること、エンディングノートの作成と成年後見人を選んでおくことを終活に付け加えた。曾野綾子さんの「野垂れ死のすすめ・・・」には共鳴する点もあるが、だれにも迷惑をかけず、やりたいことをやりとげ、死後も後悔しない人生を目指したい。

みどり、緑に関わって

4 班 鶴 敏子

2005 年に「すいたシニア環境大学」を卒業後、SELF（すいた環境学習協会）に所属して、地元の環境保全に関わって 9 年になります。

学習支援や、社会貢献を通して、限りある自然を大事にし、「みどり・緑」を次世代に残したいと思い、地元の方々の関心に繋がる活動をしてきました。

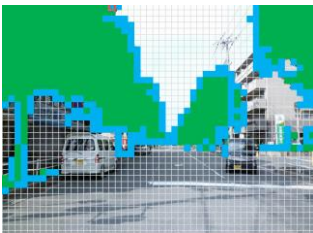
しかし、当初は専門知識も無い私にとって、樹木の名や生態系の勉強をする事が先決と思い、先輩が卒業されたシニア自然大学校を受講する事になり、今があります。吹田市「いきいきみどりの基本計画Ⅱ」にタスクチームを結成し、みどりに対して提言しています。その中で、市民の関心を高める為に、公園、街路樹の銘板掛けを市や企業の助成金を頂きながら 5 年間 500 枚以上の手作りの名札を掛けてきました。

人々が町中で目にする「みどり・緑」は存在を実感しやすい緑だと思えます。これらの緑を充実させる事は、人々の心に潤いと安らぎを与え、心のオアシスを広げる事が出来ます。

今年度 10 周年を迎える「すいた環境学習協会」の新しい試みとして、「大阪府のまちの緑視率・みどりを感じる街づくりを目指して」という取り組みに参加すべく、タスクチームを 5 月に立ち上げ、参加会員を募りました。春 1 回、冬 1 回と参加者が調査場所を決め、ガイドラインに沿った測定方法でデーターを収集・集積して保存していきます。2～3 年観測し、今後緑化目標の実現に繋がる様に活動していけたらと思っています。



撮影画像①〔8 月現況〕



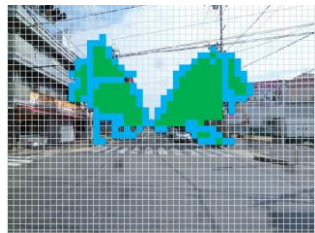
緑視率 33.79%

居住地近くの

《吹田市山田南 6-13



撮影画像②〔8 月現況〕



緑視率 11.34%

ユリノキの街路樹》

ジオの目で観察

5 班 瀬野 巖

至便で特異な場所武田尾駅周辺、興味深い植物が変化を持って見せてくれています。年に何回も来て植物観察をしているも、その根の地盤＝地質（ジオロジー＝geology）についても興味があり「ジオ的」な観察の目で眺めてみました。

講習会で実地検証を経験したところ、大体 1 億年以上の年代差がある、中生代（白亜紀）と古生代（ペルム紀）の全く異なる地層が接しており、ジオ的にとっても興味深いことが分かりました。

地層の境目は、武田尾駅から約 100m 位下流にあります。（図参照…○印はポイント）

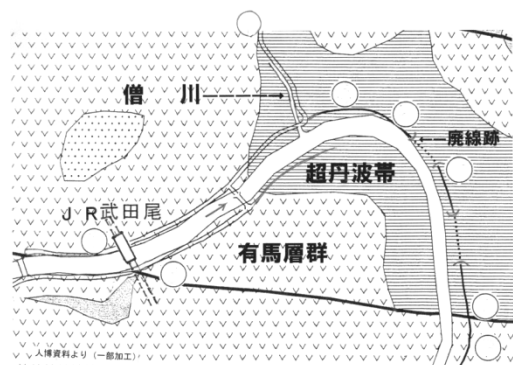
①上流側は約 8 千万年前（まだ日本列島の形ナシ、大型恐竜の時代）の火山噴出の地層（有馬層群という）が両岸にみられ、岩石中に礫（小石等）が含まれるのが肉眼でも分かります。（凝灰角礫岩）

②下流側は 2 億数千万年前の超大陸の下にプレートが沈み込んだ後、地殻変動で陸上に現れた地層（超丹波帯という）が見られます。

- ・駅下流で合流する「僧川」の上流では泥岩、砂岩、石灰岩、などの露頭があり、運がよければフズリナ化石が見つけれられるそうです。（僧川：「ぼうさんがわ」という）

- ・廃線跡では、川岸に砂岩ブロックが混入した泥岩、沢で石灰岩、崖にチャートのブロック（放散虫化石、ルーペではわからない）・緑色岩のブロックが見られます。緑色岩は海底で溶岩（玄武岩質）が噴火したものでなんとなくまるい形の「枕状溶岩」が見られます。阪神地域ではここだけといわれています。

武庫川溪谷、ここは洪水（攪乱）、V 字谷、中生代の凝灰岩類・古生代の堆積岩類、河原には上流の丹波帯・六甲山の岩石があり、更に水系全体は緩やか、上流域に氷上回廊など、とても自然として興味ある地域だなと感じているところです。



“トンボの変態に感動”

6班 阪口 あつ子

昆虫の大好きな孫と、ウスバキトンボが出始める6月頃からトンボを追っかけて、いろんな公園に毎日のように出掛けます。

自宅近くには、トンボが生息できるいい環境の池や沼のある公園がたくさんあります。その中でも、和泉市の黒鳥公園・岸和田市のトンボ池公園に出かけることが多いです。今年は、ウスバキトンボ・シオカラトンボ・オオシオカラトンボ・ギンヤンマ・オニヤンマ・チョウトンボ・ショウジョウトンボ・ウチワトンボ・コシアキトンボ・ベニアカネ・ナツアカネ・キイトトンボなどなどを捕まえては図鑑で調べる孫に付き合いました。

イトトンボの仲間は羽が華奢で胴体も細く、生育範囲も限られていますが、ギンヤンマなど、大型のヤンマの仲間は羽が大きく遠距離を飛び、動きが速いです。しかし孫は、大型ヤンマを追っかけます。ギンヤンマが来るのを待つ間「あれは雄、こっちは雌やで」と孫との会話が弾みます。私はなんとなくトンボの名前を覚えるようになり、体色の違いで雄雌の区別もつくようになってきました。



そんなある日、「生き物サンキュー」という番組で、昆虫の変態の様子と過程を視聴する機会がありました。卵→成虫に、脱皮によって大きさだけが変化する「無変態」（シミ、イシノミ）、卵→幼虫→蛹→成虫になる「完全変態」（チョウ、ハチ、ハエ、カブトムシなど）・幼虫期に数回の脱皮を繰り返し成虫になる「不完全変態」（セミ、カマキリ、トンボなど）と昆虫の変態は発達の違いによって3種類に大別されます。

トンボの変態が始まりました。ヤゴの背中からまず頭と背を出し、反り返ります。体が落ちないように細い糸で殻と体を繋ぎ、体が乾く間、同じ体勢で数時間じっと待ちます。続いて尻尾と羽を出し、数分後にピーンと羽を広げました。その姿を見た瞬間、テレビの前で「すごい！！」と、私は思わず拍手を送りました。生命の誕生のすばらしさに感動です。来年は自分の手でヤゴを羽化させて、背中から体や羽の出る瞬間の感動を体感したいものです。

チワワの祖国

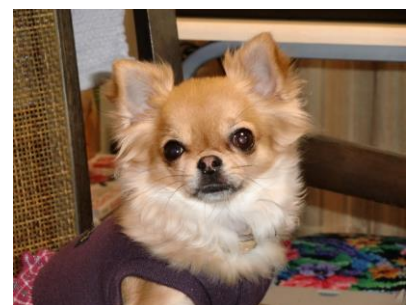
6班 藤原 雄平

日本で一番有名な犬は？と聞くと、昔なら忠犬ハチ公だったでしょうが、今はソフトバンクのCMに登場する白い犬と答えが返ってくるのではないのでしょうか。その白い犬を見るたびに、必ずTVに吠えついてうるさい我が家の忠犬？は8歳になる雌のチワワです。我が家に来た時は片手に乗るサイズだったのが、今や飼い主に負けないメタボ犬に変身です。

さて最近の事です、チワワの原産地は中国という説があると聞いてビックリ！チワワの歴史としては「メキシコのチワワ州に原産していた小型犬がアメリカに持ち込まれ、より小型のペット犬として改良されて世界中に広まった」と通常言われており、これもまた何でも自分のものだと言主張する中国のヨタ話だと思いましたが、とりあえず調べてみたら驚いたことに、チワワは原産地が未だに謎に包まれている珍しい犬種であるとなっているではありませんか。

メキシコからアメリカに持ち込まれたのは19世紀半ばの事で比較的新しく、これは事実として間違いないようなので、問題は元からメキシコに住んでいたのか？それとも他所からメキシコに持ち込まれたのか？ということになります。他所の有力地として、中国とヨーロッパが挙げられています。中国説では中国で小型化された犬をスペイン人がメキシコに持ち込んだ説と、メキシコに移民した中国人が持ち込んだ説の2説。ヨーロッパ説は古代エジプトにいた小型犬が地中海を経て西ヨーロッパに広がり、スペイン人がメキシコに持ち込んだという説。そして、メキシコ説は9世紀頃メキシコに住んでいた原住民トルテカ族が飼っていた犬が、チワワであるという説です。

ということで決定説は無いのですが、自分としてはこれまで通り、チワワの祖先は昔からメキシコに住んでいた説を信じたい。傍らで寝転がっている我が家の忠犬に「オイ、お前の祖先の国はどこなんだい？」と聞くと、「そんなことアタシが知る訳ないでしょ、フン」という顔をしてプイと横を向かれてしまいました。



安倉上池の白鳥一家の半年



2014/5/6



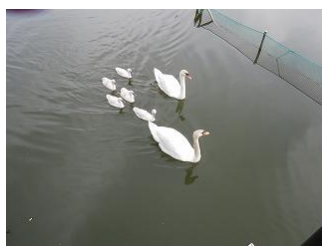
2014/5/13



2014/5/20



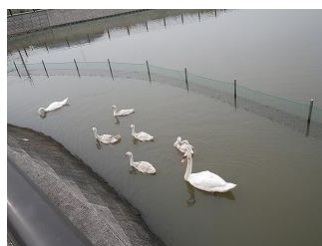
2014/5/20



2014/5/27



2014/5/27



2014/6/17



2014/6/24



2014/7/1



2014/7/8



2014/7/15



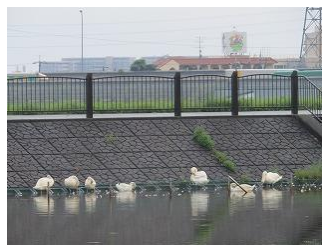
2014/7/22 一家とアオサギ



2014/7/29



2014/8/12



2014/8/26 一家と対岸にはダイサギ、コサギ、ゴイサギ



2014/9/2



2014/9/2



2014/9/9



2羽足りませんか？



2014/9/11 4羽に！



2014/10/7



2014/10/14 3羽に



2014/11/11 親2羽に

班長になって

4班 米虫 和子

この4月から8カ月、班長をやってきました。
今年の4月、私にとっての自然と文化科は「えっ、
こっって新人が班長・副班長なの?」という驚きから
始まりました。何もわからないもの二人が班長と
副班長で、やっていけるのかと悩み、「どうするの?
何をしたらいいの?」と、何回叫んだことか・・・。

いざ班長になって、仕事自体はほとんどが事務的
なことですが、それでも失敗が多かったのです。い
え、現在形で、多いのです。やらなくても良いこと
をしてしまったり、メールを送れば添付資料を忘れ
たり…でも、班の人たちみんなが助けてくれました。
仕事に関しては「それはしなくていいよ。」と教え
てくれ、添付忘れも笑って済ませてくれました。出
欠確認も、欠席は必ず連絡してくれます。これもと
ても嬉しいことです。特に駅などで集合してから移
動するとき、遅れるのか欠席なのかははっきりするの
はとても助かります。

本科のとき毎回反省会があり、いろいろ話をした
のがとても楽しかったので、自然と文化科になっ
ても話し合う機会をしっかりと持ちたいと思ってい
ます。でも、初めての班の懇親会のとき、どこで、ど
のくらいの予算で会を持てばよいのか全くわかり
ませんでした。そんなときでも班の人がすぐに教え
てくれました。

私の場合は班の人たちがいろいろ教えてくれま
したが、これは自分から積極的に班の皆さんに聞い
たからだと思います。他のサークルでの先輩たちと
か、知っている人が多かったのも気軽に聞けた理由
の一つです。でも、知った先輩がいなかったら…気
軽に相談できる人がいるのは心強いです。新人同士
相談していても、どこか不安が残ります。班長か副
班長（副班長の方が良いのかもしれませんが）、ど
ちらかがベテランの方が新人にとってはやりやすい
と思います。

班長になったことで自分から進んで行事に参加
するようになりました。班長で無ければ、後ろから
こっそり付いて行っただけだったでしょう。今は気が
張っているためか、風邪をひくことも少ないです
（反動が怖いのですが）。班長になったおかげで、
自然と文化科に対して面白いと感じることが多い
ような気がします。でも来年は、後ろから付いてい
きたい…。

秋の俳句・短歌など

風の子

重ね着し震える心春を待つ
もうすぐと準備している冬芽観て寒さのあとの明
るさを待つ
冬芽育ち寒さに向かう帰り道

谷坂修二

ちびちびと語りかけるや酒一合
枯れ落ち葉胸に挟みて友となり
虫食いも意匠を凝らし紅葉散る
落ち葉分けどんぐり達が根を下ろし

老人ボケ

谷坂さんこの山はキツイデスヨ登れますか
天国まで登れます

谷坂さん診療室にお入りください

谷坂さん早くしてください

3時間も準備してたんや

自然と文化だより

皆様のご協力により23号が発行出来ま
した。次号もお楽しみに！（広報委員会）